

妃のいない大王

「神武と卑弥呼の時代が一致する」

大野克浩

考古学的に 10 代崇神天皇が 4 世紀初頭になりつつある。

魏志によればそれ以前の 3 世紀は女王の時代である。

それと呼応するかのように、崇神以前に妃のいない天皇たちがいる。

初代神武から 6 代孝安までである。

もちろん彼らには正后はいる。

しかし妃はいない。

大王(おおきみ)なら自分の血筋を絶やさないため、複数の妃がいるのが普通である。

ところが彼らには妃がない。

なぜ彼らには妃がないのか。

魏志の記述通り、この時代が女王の時代だからである。

つまり彼らは大王ではなかったのである。

では話は簡単、彼らの正后をみればいいのだ。

その中にヒミ、ヒメ、ヒム、またはトヨ、イヨがいればいい。

もしいれば、その女性たちこそは魏志の卑弥呼と台与であり、邪馬台国論争は簡単に終焉する。

それがいるのである。

・推定 3 世紀大王譜

①神武・「ヒメ」タタライスズ

② 綏靖・イスズヨリヒメ 生きてた「ヒメ」タタラが女王

③ 安寧・ヌナソコナカツヒメ 生きてた「ヒメ」タタラが女王

④ 懿徳・アマ「トヨ」ツ

⑤ 孝昭・ヨソタラシヒメ 生きてたアマ「トヨ」ツが女王

⑥ 孝安・オシヒメ 生きてたアマ「トヨ」ツが女王

ヒメとトヨの時代である。

そして 7 代孝霊には複数の妃。

実質の男王は孝霊の時代からであろう。

それは箸墓古墳の時代である。

邪馬台国とは簡単である。
邪馬台国の都とは「ヒメ」タタライスズ媛が住まわれた葛城、
奈良県御所市である。

纏向(遺跡)に卑弥呼はいない。

魏志の卑弥呼とヒメタタラは一致するか

私はヒメタタライスズヒメが卑弥呼であるという説を提起する。
では魏志に書かれてる卑弥呼とヒメタタライスズヒメが一致するのか。

まず時期。
崇神4世紀初頭として約6世代前の神武が2世紀後半～3世紀あたり。
当然、ヒメタタライスズもその時代である。

そして何より名前。
別名でなく、この女性ほど「ヒミコ」に近い人物はいない。

【年已長大 無夫壻】

私が卑弥呼をヒメタタライスズ媛だと言った時、
必ず受ける反論が「卑弥呼は独身のはずだが？」というものである。

年已長大、無夫壻

- ① 歳すでに長大である。夫はいない
- ② 歳すでに長大であるが夫はいない

- ①と②では意味が大きく異なる。
- ①では寡婦もありうる。
- ②ではまるで生涯独身である。

寡婦でも生涯独身でも、どちらでも有りと考えれば良い。
にも関わらず、卑弥呼は生涯独身であったと断定した解釈をする人が多い。
後の時代の斎王か何かとイメージが重なってるのだろう。
古今東西、世界のどこに女王の「恋愛、結婚、出産」という、女性としての普通の欲求を
を妨げる国があったのか。
むしろ周りが率先して婿をみつけてあげるのが常識。
頭が固い。
こういう人が多かったから卑弥呼が見つけられなかったのだ。

ヒメタタライスズが夫の神武に先立たれ、2代綏靖が皇位を継ぐまでに空白期間(書紀では3年)がある。魏志の記述はこの時期の様子を描写したのだろう。

【事鬼道 能惑衆】

鬼道を銅鐸祭祀と考えている。
魏志によれば「其の国」は2世紀前半から存在する。
大和では鏡は3世紀の纏向古墳群から出るので、
それ以前の大和は銅鐸の時代である。
ヒメタタライスズの鴨氏は銅鐸族である。
また中国側が鏡祭祀を鬼道と表現するのかという疑問がある。
やはり鬼道とは銅鐸祭祀であろう。

【唯有男子一人 給飲食、傳辭出入】

この男子一人とは、神武の連れ子であり、
彼女の義理の息子であるタギシミミであろう。
ヒメタタライスズとタギシミミの二人はやがて結婚する。

【有男弟佐治國】

中国には女弟という表現もあるので、
この男弟とは「徒弟」の弟、つまり臣下・部下と見る。
ならば彼女に代わり政治を行ってた実兄の天日方奇日方命(食国政申大夫)の事であろう。

卑弥呼最有力候補は畿内説ではモモソ媛である。
しかし崇神治世まで生きたモモソ媛が卑弥呼であるわけがない。
時代が違い過ぎる。
また一皇女であるモモソ媛が女王などとはとても言えまい。
また寡婦の時期がない。

一方、九州説の最有力候補はアマテラスだが、神武より5世代(5代)前なら、
神武東征時期と時代が違う。
大和での古墳時代開始が4世紀なら時代も合ったが、
今では2世紀末～3世紀初頭からが定説である。
そしてアマテラスが九州のどこにいたのか不明、また本当に実在したのかも不明。
私はアマテラスは高天原(葛城)に実在したシタテルヒメ(タカヒメ)がモデルだと考えている。
もしそうならアマテラスはそもそも九州にはいないことになり九州説は土台から崩れる。

神武と卑弥呼の時代が一致する

10代崇神天皇の時代を4世紀初頭とする根拠は、古事記に「山邊道勾岡上」と記される10代崇神天皇有力墓である西殿塚古墳、または行燈山古墳が、考古学的に広義の布留式前半(4世紀初頭)の蓋然性が高くなっていること、(注1)

また、吉備津彦の墓としか考えられない中山茶臼山古墳、崇神に反乱を起こした武埴安彦の墓の可能性が極めて高い椿井大塚山古墳、先代旧事本紀に交野連と記されてるタベノスクネの墓である可能性が高い雷塚古墳(森古墳群)、四道將軍ゆかりとしか考えられない会津・一簣古墳群など、崇神時代の人物の墓もことごとくこの時期である。

また日本書紀と古事記では初期天皇の没年干支が違うが、例えば崇神前後の開化天皇や垂仁天皇の没年干支を記載していない古事記は、すべて記載している日本書紀と比べ、むしろ伝承しきれなかった事を正直に伝えており、逆に記載されている崇神の没年干支は、それ自体が強く伝承されてきたと判断し、その没年干支は充分信用できると考える。崇神の没年は、考古学とも照合し、西暦318年が妥当であり、崇神天皇の在位を西暦300年頃からとみる。

大和盆地で、弥生時代から続く環濠集落が終了し、土師器を伴う古墳時代が始まる庄内0式期が2世紀末の可能性が高くなってきている。(注2)

崇神時代から庄内0式期までを120年と計算すれば、当時の平均寿命から推定した父子の1世代間20年で約6世代である。

記紀の神武天皇から崇神天皇まで父子継承9世代という記述は、天皇の父子継承が近代になってから顕著であることや、また記紀は何らかの目的で、明らかに意図的に時代を古く引き延ばしていることを考慮すれば(後述)、記紀の父子継承9世代は史実と認めがたく、むしろ先代旧事本紀などに記載されている崇神時代の人物(例・タベノスクネ)から、神武時代の人物(ウマシマジ)まで6世代が考古学的にも蓋然性が高く、父子の1世代間を20年として、神武天皇は卑弥呼と同時期の人物であり、この時代のヒミ、ヒメ、ヒムという発音に近い最高位の女性は、

ヒメタタライスズ媛以外にいない。

また応神天皇墓である蓋然性が極めて高い誉田御廟山古墳外堤出土の須恵器TK73形式が、最新の須恵器編年で5世紀初頭になること、また文献的にも応神天皇元年が390年と見なされること(注3)、応神元年を390年とし、下ること30代前後の天皇平均在位が11年弱であることから(別表①)、神功皇后を含めて15代遡れば、神武天皇は3世紀前半になり、やはり卑弥呼と同時期になる。

2世紀末の庄内0式期から、畿内の土器・土師器(庄内式土器・布留式土器)が、九州から北陸・関東にまで波及してることは、その震源地である畿内に、魏志の記述通り、一人の強力な女王がいたことを示す。崇神以前に存在したこれほどの女王が記紀に記載されていないはずはない。やはり卑弥呼は実在し、時期的にも卑弥呼はヒメタタライスズ媛以外にいない。

3世紀推定年表

200年頃	ヒメタタライスズ	神武
	ヒメタタライスズ	綏靖
	ヒメタタライスズ	安寧
250年頃	アマトヨツ	懿徳 孝昭
270年頃	アマトヨツ	孝安
		孝霊 孝元 開化
300年		崇神

なぜ古代天皇は100歳を超えるのか 卑弥呼から5世代前の帥升

では卑弥呼がヒメタタライスズ媛だとして、なぜ隠す必要があったのか。

107年、後漢・安帝に朝貢した倭国王帥升を、

神武・ヒメタタライスズ媛から約5世代前のスサノオと考える。

国史とはプライドである。

記紀編纂の際、始祖王自ら出向いての朝貢という極めて不名誉な記述を避けたいがために、時代を大きくずらし、その結果、100歳を超える天皇の記述になったと考える。

記紀の金鷲説話など、神武東征の大袈裟な記述は、

実際には女王国であった事を隠すため、ことさら猛々しい男王を強調し、

特筆大書したためとみる。

また7世紀に採用された「天皇・皇后」という称号は、実際には大王ではなかった神武を、遡って大王に見せかけるために採用したとみる。

朝貢年

266年 台与 アマトヨツ

・

248年 卑弥呼 ヒメタタラ

・

・

・

・

107年 倭国王・帥升 スサノオ

表①(応神390年からランダムに採った平均在位)

25代平均	応神天皇390年～39代・弘文天皇没672年	11,28年
28代平均	応神天皇390年～42代・文武天皇没707年	11,32年
30代平均	応神天皇390年～44代・元正天皇没724年	11,13年
33代平均	応神天皇390年～47代・淳仁天皇没764年	11,33年
35代平均	応神天皇390年～49代・光仁天皇没781年	11,17年

参考資料

- 1・石野・豊岡「纏向新編年」
- 2・久住猛男「土師器から見た前期古墳の編年(2015)広域編年の検討」
- 3・「倉西裕子『東アジアの古代文化112号』の『日本書紀』における紀年の編成をめぐる一考察」

あとがき

以上、卑弥呼と神武の時代が一致し、
卑弥呼はヒメタタライスズ媛であり、邪馬台国は葛城である。
神武・ヒメタタライスズ媛より5世代前のスサノオは帥升である。
記紀編纂者は、国史編纂にあたり、
始祖王の朝貢という不名誉な記述を避けるため、
時代を大きく改ざんしたという意見を提起したわけだが、
では巷間、この場所こそ邪馬台国の都であり、
箸墓古墳が卑弥呼の墓だという意見が根強い纏向遺跡について、何なのか、
誰の墓群なのか、いずれ稿を改めて提示したい。